広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	沈約『宋書』謝靈運傳について
Author(s)	森野, 繁夫
Citation	中國中世文學研究 , 55 : 1 - 17
Issue Date	2009-03-27
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051409
Right	
Relation	

沈約『宋書』謝靈運傳について

森野繁夫

『宋書』謝靈運傳は、靈運が廣州で棄市に處せられた時の作「臨死詩」で結ばれている。この詩は唐初の釋道宣『廣弘明集』にも収められているが、内容にかなり異同がある。すなわち句数は『宋書』引が全12句で、『廣弘明集』の方は全14句。『宋書』引の内容は佛教に関りがないが、『廣弘明集』の方は、當然のことながら佛教色が濃厚。どちらを採るかによって最期に臨んでの靈運の思いが大きく異なってくるし、さらには靈運の人物、生涯についての解釈も異なってくる。

『宋書』に引くものと『廣弘明集』のどちらの「臨死詩」が本來の形なのか、まだ結論は出ていないようなので、これまで調べたことを次の順序でまとめておくことにした。

一、謝靈運「臨死詩」
　1　詩の内容、構成
　2　佛教的要素の問題
二、「臨死詩」本來の形
三、沈約「謝靈運傳」撰述の意図
　1『宋書』謝靈運傳の構成
　2『宋書』顔延之傳との関わり

一　謝靈運「臨死詩」

謝靈運「臨死詩」には、『宋書』謝靈運傳に引くもの（全12句）の他に、『廣弘明集』巻三十上に収めるもの（全14句）がある。（『宋書』は齊の永明六年488に完成。『廣弘明集』は唐初、釋道宣「高宗乾封二年667卒」の編）。両者は句数だけでなく、後半部の内容が大きく異なっている。すなわち、

『宋書』謝靈運傳に引くもの。

①龔勝無餘生　龔勝に餘りの生は無く
②李業有終盡　李業に終に盡くる有り
③嵇公理既迫　嵇公は理既に迫り
④霍生命亦殞　霍生は命も亦た殞く
⑤悽悽凌霜葉　悽悽たり霜を凌ぐ葉
⑥網網衝風菌　網網たり風に衝ふ菌
⑦邂逅竟幾何　邂逅竟に幾何ぞ
⑧修短非所愍　修短は愍ふる所に非ざるも

⑨送心自覚前　心を送る 自覚の前
⑩斯痛久已忍　斯の痛み 久しく已に忍ぶ
⑪恨我君子志　恨むらくは我が君子の志もて
⑫不獲巖上泯　巖上に泯ぶるを獲ざること

「餘」字、廣作「遺」。「李」字、廣作「季」。
「公」字、廣作「叟」。「生」字、廣作「子」。
「凌」字、廣作「後」。「葉」字、廣作「柏」。
「網網」二字、廣作「納納」。「幾何」二字、廣作「無時」。
「自」字、廣作「正」。「獲」字、廣作「得」。
「送心自覚前、斯痛久已忍」二句、廣在「恨我君子志、不獲巖上泯」二句下。

・龔勝に 餘された生は無く、李業は 終に盡くる運命であった。嵇公は 理として既に死が迫っており、霍生も命は亦た殞きてしまった。」

＊以上の「君子の志」を遂げんとして果たせなかった四人に自分を重ね合わせながら、

・悽悽として 霜を凌がんとする葉、網網として 風に衝ふ菌。よき時 よき人との出會いは 結局どうだったのか、命の長い短いは 愍える所ではないけれど。」

＊自分も空しい抵抗のすえに、彼らと同じようなことになってしまった。これまで、

・己の生き方を注意深く見つめながら、この痛みを 久しく忍んできたのだが。恨まれるのは 我が「君子の志」をもって、巖上に泯ぬことができなかったことだ。

＊「斯の痛み」とは、権力者の圧力のために「君子の志」を果たすことができなかったこと。「恨」まれるのは「君子の志」を持ち続けて「巖上」に果てることができなかったこと。

『廣弘明集』巻三十上所収のもの。

①龔勝無遺生　龔勝に遺されたる生の無く
②季業有終盡　季業に終に盡くる有り
③嵇叟理既迫　嵇叟は理 既に迫り
④霍子命亦殞　霍子は 命も亦た殞く
⑤悽悽後霜柏　悽悽たり 霜に後れたる柏
⑥納納衝風菌　納納たり 風に衝かれたる 菌
⑦邂逅竟無時　邂逅 竟に 時 無し
⑧修短非所愍　修短は 愍ふる所に非ざるも
⑨恨我君子志　恨むらくは 我が君子の志もて
⑩不得巖上泯　巖上に泯ぶるを得ざりしこと
（しかしながら、これまで）
⑪送心正覚前　心を正覚の前に送りて
⑫斯痛久已忍　斯の痛み 久しく已に忍ぶ
⑬唯願乘來生　唯だ願ふは來生に乘じ
⑭怨親同心朕　怨と親に 心朕を同じくせんことを

『宋書』引⑨⑩「恨我君子志、不得巖上泯」在⑪⑫「送心正覚前、斯痛久已忍」二句上、⑬⑭「唯願乘來生、邂逅竟無時」二句、『宋書』引無。

・龔勝には遺された生命は無く、季業は 終に盡きる定めにあった。嵇叟は 理として死が既に迫っており、霍

子は 運命が亦た殞きていた。
・悽悽として 霜に後れた柏のごとく、網網として 風に衝かれた菌のように。よき時 よき人との出會いは 竟に機會が無かった、命の長短は 愍える所ではないけれど。恨むらくは 我が「君子の志」を保って、巖上に泯ぶことができなかったこと。」
・これまで「佛の悟り」に従って、斯の痛みを久しく忍んできたのだが。願わくは來生においては、怨のある人、親しい人の區別無く 同じ思いで接したいものだ。

『宋書』引、『廣弘明集』所収のどちらが本來の形なのか。『宋書』所収の方には佛教色が無いが、『廣弘明集』の方は佛教と深く関わっており、どちらが本來のものであるかによって、靈運という人物の見方が大きく異なってくる。

すなわち、前朝の遺臣であり、「褊激の性」のゆえに、「君子の志」を遂げんとするもかなわず、佛の教えによる冥福を願いながら最期を遂げた人物なのか、それとも、権力側の悪意に最後まで抵抗を続けたが其の甲斐もなく、「君子の志」を遂げることなく無念の最期を遂げた人物であったのか。

二　「臨死詩」本來の形

謝靈運の「臨死詩」は、以上述べたように『宋書』靈運傳に引かれているものと、『廣弘明集』に収められているものの二通りが傳えられているが、どちらが本來のものなのであろうか。

1　詩の内容、構成

先ず、両作品の内容と構成を比較してみる。手を加えられた作品には、どこか不自然な箇所があるものである。

『廣弘明集』所収の場合は、①～④句で、「君子の志」を果たさんとして果たせなかった前代の人たち、漢の龔勝、後漢の李業、西晉の嵇紹（或いは嵇康）、霍原を列擧する。「君子の志」とは、『易』困卦の象傳に「澤に水無きは困。君子は以て命を致して志を遂ぐ」とあり、君子は國家の困難な時に當たっては、命を棄てても忠君の志を遂げるべきことをいう。龔勝は王莽が漢を奪ったとき、入朝を請われたが拒否し、絶食して死んだ。李業は後漢の初め公孫述が益州に據って帝と稱して業を召したが、業はそれを拒否し、送られた毒を飲んで死んだ。嵇紹は、西晉末の大乱で、恵帝を身を以て守ろうとして死んだ。霍原は僭上の振舞いを重ねていた王浚の命に従わなかったために恨まれて殺された。靈運の場合の「君子の志」の内容は、祖父謝玄、その叔父の謝安らが、主君である晉王室に盡した忠節であったろう。靈運はそれに類する業績を挙げることを願っていた。

①～⑧句までは、文字の異同が幾つか有るが『宋書』引と内容にあまり変りはない。問題はその後の部分である。すなわち、⑤～⑧句の、上述の四人の「君子」に自

分を重ね合わせながら、不當な圧力に耐えて抵抗を續ける姿と、結局、救いの手は得られなかったことを詠った後に、

⑨恨我君子志　恨むらくは　我が君子の志もて
⑩不得巖上泯　巖上に泯ぶるを得ざりしこと
⑪送心正覚前　心を正覚の前に送りて
⑫斯痛久已忍　斯の痛み　久しく已に忍ぶ
⑬唯願乘來生　唯だ願ふは　來生に乘じ
⑭怨親同心朕　怨と親に　心朕を同じくせんことを

のように、『宋書』では結びになっている「恨我君子志、不獲巖上泯」二句が、「送心正覚前、斯痛久已忍」の前に置かれており、『宋書』引には無かった「唯願乘來生、怨親同心朕」二句が結びとなっていることである。

『廣弘明集』に収める詩の構成からいうと、⑨⑩「恨我君子志、不獲巖上泯」二句は、⑤～⑧句の流れの中に入るのであろう。「よき時　よき人との出會いは　竟にその時が無かった。命の長短は　愍うる所ではないが」に續けて、「ただ残念なことは　我が『君子の志』を懐いて、巖上に死ねなかったことだ」のように。したがって『廣弘明集』ではこれは結論ではない。ここで一息入れて、結びの第⑪～⑭句に移り「不當な圧力の為に『君子の志』を果たせない『痛み』を、全ては煩悩とする佛の教えに従って忍んできたのだったが。今は唯だ來世の冥福を願うばかりだ」と一首をまとめている。

これに對して『宋書』引の場合、前半の八句の内容は『廣弘明集』と殆ど変りは無く、⑤～⑧句では、①～④句に挙げた四人の「君子」に自分を重ねながら、権力の不當な圧力に耐えて抵抗を續ける己の姿と、しかし結局、救いの手は得られなかった歎きを詠う。

結びの四句は、⑨⑩で、己自身と、自分を取り巻く現実を直視して、「君子の志」が果たせない「痛み」を「久しく忍」んできたことを述べ、⑪⑫句では「我が君子の志」を懐いたまま「巖上に泯ぶ」ことができなかったのが「恨」めしいと言って結ぶが、ここで『廣弘明集』所収と大きく異なってくる。すなわち、既に述べたように『廣弘明集』での⑨⑩句と⑪⑫句の順序が入れ替わり、結びの⑬⑭二句が無くなっている。

（『廣弘明集』）
⑨恨我君子志
⑩不得巖上泯
⑪送心正覚前
⑫斯痛久已忍
⑬唯願乘來生
⑭怨親同心朕

（『宋書』）
⑪送心自覚前
⑫斯痛久已忍
⑨恨我君子志
⑩不得巖上泯

両者を比べるに、『宋書』引の方は「君子の志」を遂げんとして果たせず無念の最期を遂げた四人の「君子」を挙げて、自分も彼らと同じように権力の不當な圧力に抗してきたが、結局　志は遂げられなかった、という格調の高

い前半と、その後の、志の果たせなかったわけを我が身に反省して、久しく其の痛みを忍んできたのだが、恨めしいのは「君子の志」を胸に巖上で死ぬことのできなかったこと、という「後ろ向き」の姿勢が、どうもうまく繋がらない。

この詩の流れから言えば、最後は「君子の志」を遂げんとして非業の最期をとげた前述四人の「君子」と、同様の運命を辿ることになった無念の思いで結ばれるはずであろう。

一方『廣弘明集』に収める全14句では、上述四人の「君子」に自分を重ねながら、時の権力者の圧力に耐えて抵抗を續ける姿と、結局、救いの手は得られなかったことを詠った後で、⑨⑩句「恨我君子志、不獲巖上泯」（残念なのは 我が『君子の志』を懐いたまま、巖上に死ねなかったこと）と、ここで一息入れて結びの段落に移り、⑪～⑭句で「不當な圧力の為に『君子の志』を果たせない『痛み』を、佛の教えに従ってこれまで忍んできたのだったが。今は唯だ來世の冥福を願うだけだ」と結ばれる。

以上のように両者を比較してみて、一篇の構成が整っていること、また靈運の心情の流れが自然である点で、『廣弘明集』に収める全14句の方が本來の形のように思われる。

なお、沈約は「臨死詩」に続けて、

詩所稱龔勝李業、猶前詩子房魯連之意也。

詩に稱する所の「龔勝、李業」は、猶ほ前詩の子房、魯連の意のごときなり。

という補足説明を加えている。「前詩」とは、臨川郡において自分を捕えんとした官兵に抵抗した時の詩、

韓亡子房奮、秦帝魯連恥。
本自江海人、忠義感君子。

のことであり、「臨死詩」の冒頭の「龔勝、李業」は臨川郡での詩における「子房、魯連」と同じような人たちのことだという。つまり「龔勝、李業」らは、前詩の「子房、魯連」と同じく「君子の志」を遂げんとした人たちであり、靈運も彼らと志を同じくして果てたことを沈約は強調しているようだ。

沈約が何故このような補足をしなければならなかったのか。おそらくそれは『宋書』の「臨死詩」の結び、

送心自覺前、斯痛久已忍。
恨我君子志、不獲巖上泯。

という、死に臨んでの靈運の思いが、前半に挙げた四人の「君子」の激しい生き様、

龔勝無餘生、李業有終盡。
嵇公理既迫、霍生命亦殞。

に比べて、些か消極的な感じを與えることが氣になったためであろう。

以上述べたような理由で「臨死詩」は、『廣弘明集』に収める全14句の方が本來の形のように思われるが、そう

であれば誰が改作の手を加えたのであろうか。手がかりは一つある。それは『宋書』引には、『廣弘明集』所収には濃厚であった佛教色が無くなっていることであり、それは誰かが意図的に除いたとしか考えられないからである。すなわち『宋書』引の方は『廣弘明集』所収に比べて、

・⑪「送心正覚前」の「正覚」（佛の悟り）を、佛教色の薄い「自覚」（自分の力や生き方を自ら悟る）に改めている。

・來世の冥福を願う、結びの⑬「唯願乗來生」⑭「怨親同心朕」二句を省いている。

・⑨「恨我君子志」⑩「不得巖上泯」二句を結びにまわして、改作によって生じた一首全体の纏まりのなさを整えようとしている。

このように、実に巧みに佛教色を排除して詩句をまとめており、それは意図的としか考えられない。それでは誰がこのように巧妙に改作したのか。おそらくそれは『宋書』霊運傳の撰者であり、當代詩壇の大家でもあった沈約ではなかったか。[1]以下、このような推測に基づいて論を進めることにする。

さてそれでは沈約は、何故「臨死詩」にこのような手を加えたのか。おそらくそれは彼の霊運観に基づいたためであろう。後で述べるように沈約は、「霊運は『君子の志』を遂げんとしたが果たせず、無念の最期をとげた人物」と考えており、従って「臨死詩」に來世の冥福に頼る内容があると自分の懐いている霊運観に抵触することになる。そこで沈約はこのような変更をしたのではなかろうか。

2　佛教的要素の問題

以上は『宋書』引「臨死詩」には沈約の改訂が加えられている、とすることについての推論であるが、次に『廣弘明集』所収には存在していた佛教的要素が『宋書』引の方では無くなっていることについて、霊運の「臨死詩」にそれがあっても不自然ではないという拠り所を、霊運の生涯の面から見てみる。

①霊運と佛教の関わりについて。

②元嘉五年（四二八）四十四歳の春に侍中の職を辞して始寧の墅に帰ってから、十年（四三三）に廣州に徙されるまでの數年間の霊運の動静について。

①霊運と佛教の関わりについて。

・靈運は年少の頃から佛教と深く関わっている。十五歳の時には已に佛教を信仰しており、慧遠に入門を願うも許されなかったという。（謝霊運「慧遠法師誄序」）

・永嘉郡に左遷されていた時には、行を共にした諸僧との「辯宗論」論争があり、頓悟と漸悟について激論を交わしている。（謝霊運「辯宗論」）

・永嘉太守を一年で辭して始寧に帰ると、山中で曇隆法師らと二年間の佛道修行を續けている。（謝霊運「山居

賦」）

・文帝に徴され、始寧の墅を出て出仕。文帝の待遇が意に適わず、二年後に再び始寧に帰るが、會稽太守孟顗と佛教の悟りの方法「頓悟」と「漸悟」のことで対立。（『宋書』本傳）

・臨川内史に赴任する前、都で慧厳らと佛典（『大般涅槃經』）修改の作業を行う。（『高僧傳』巻七、慧厳傳）

靈運の佛教信仰はこのように生涯に亘っての深いものであり、「臨死詩」の結びで來世の冥福を願ったとしても不自然なことではなかろう。

②元嘉五年以後、廣州流徙までの靈運の動静

元嘉五年（四二七）に病氣療養ということで都から始寧に帰らされてから、會稽太守孟顗との確執を経て臨川内史に遷され、郡で靈運逮捕のために派遣された官兵に反抗して廷尉に送られるまでの数年間における靈運の言動は、永嘉太守辞任後の始寧の墅における行動とは大きく変化している。その様子を、

1 始寧の墅における仲間との荒宴―免官
2 農地拡大と、従者数百人を連れての山中遊行
3 會稽太守孟顗との確執
4 臨川郡における遊放、反逆。

の順に見ていく。

1 始寧の仲間との荒宴―免官

靈運以疾東歸、而遊娯宴集、以夜續晝。復爲御史中丞傅隆所奏、坐以免官。

靈運は疾を以て東歸するも、而も遊娯宴集し、夜を以て晝に續く。復た御史中丞傅隆の奏する所と爲り、坐して以て官を免ぜらる。（『宋書』本傳）

2 農地拡大と、従者数百人を連れての山中遊行

靈運因父祖之資、生業甚厚。奴僮既衆、義故門生數百。鑿山浚湖、功役無已。尋山陟嶺、必造幽峻、巖嶂千重、莫不備盡。嘗自始寧南山伐木開逕、直至臨海。従者数百人。臨海太守王琇驚駭、謂爲山賊、徐知是靈運乃安。

靈運は父祖の資に因りて、生業甚だ厚し。奴僮は既に衆く、義故の門生は數百。山を鑿ち湖を浚ひ、功役已むこと無し。山を尋ね嶺を陟れば、必ず幽峻に造り、巖嶂千重、備さに盡さざる莫し。嘗て始寧の南山より木を伐りて逕を開き、直ちに臨海に至る。従者は數百人。臨海太守王琇は驚駭し、謂ひて山賊と爲すも、徐て是れ靈運なるを知りて乃ち安んず。（『宋書』本傳）

3 會稽太守孟顗との確執

太守孟顗、事佛精懇、而爲靈運所輕。嘗謂顗曰、得道應須慧業。丈人生天當靈運前、成佛必在靈運後。顗深恨此言。

太守の孟顗は、佛に事ふること精懇なるも、而も靈運の軽んずる所と爲る。嘗て顗に謂ひて曰く「道を得るは應に慧業を須ふべし。丈人の天に生まるるは當に靈運の前

なるべきも、成佛は必ず靈運の後に在らん」と。顗は深く此の言を恨む。（『宋書』本傳）

又與王弘之諸人、出千秋亭飲酒、倮身大呼。顗深不堪、遣信相聞。靈運大怒曰、身自大呼、何關癡人事。

又 王弘之の諸人と、千秋亭に出でて酒を飲み、倮身にして大いに呼ぶ。顗は深く堪へられず、信を遣はして相ひ聞す。靈運 大いに怒りて曰く「身自ら大呼す、何ぞ癡人に關る事ならんや」と。（『南史』本傳）

會稽東郭有回踵湖。靈運求決以爲田。太祖令州郡履行。此湖去郭近、水物所出、百姓惜之。顗堅執不與。靈運既不得回踵、又求始寧岯崲湖爲田。顗又固執。靈運謂顗非存利民。正慮決湖多害生命。言論毀傷之、與顗遂構讐隙。因靈運横恣、百姓驚擾、乃表其異志、發兵自防、露板上言。

會稽の東郭に回踵湖有り。靈運 決して以て田と爲さんことを求む。太祖は州郡をして履行せしむ。此の湖は郭を去ること近く、水物の出る所なれば、百姓は之を惜しむ。顗は堅く執りて與へず。靈運 既に回踵を得ざれば、又た始寧の岯崲湖を求めて田と爲さんとす。顗は又た固執す。靈運は謂ふ、顗は存して民を利せんとするに非ず。正だ湖を決して多く生命を害するを慮ばかるのみと。言論もて之を毀傷し、顗と遂に讐隙を構ふ。靈運 横恣なるに因りて、百姓 驚擾すとし、乃ち其の異志を表し、兵を發して自ら防ぎ、露板もて上言す。（『宋書』本傳）

靈運は元嘉八年（四三一）會稽太守孟顗に、不穏の動き有りと訴えられ、急遽 上京して文帝に弁解。帝は靈運の無実を認めたが、彼が始寧に歸ることを許さず、そのまま臨川内史に任命した。

4 臨川郡における遊放、反逆

太祖知其見誣、不罪也。不欲使東歸、以爲臨川内史。在郡遊放、不異永嘉、爲有司所糾。司徒遣使、隨州從事鄭望生收靈運。靈運執・望生、興兵叛逸、遂有逆志。

太祖は其の誣せらるるを知り、罪せざるなり。東歸せしむるを欲せず、以て臨川内史と爲す。郡に在りて遊放すること、永嘉に異ならず、有司の糾す所と爲る。司徒 使を遣し、州の從事鄭望生に隨ひて靈運を收めしむ。靈運は望生を執・し、兵を興して叛逸し、遂に逆志有り。（『宋書』本傳）

この時期、靈運の言行がこのように荒れたものになった原因としては、それまでの度重なる「褊激」なる言行によって、政權中樞への関與がもはや絶望的になったこと。また、それまで靈運の側に在って共に佛道修行に励んでいた曇隆、靈運の忘年の友であった謝惠連が、既に側から離れていってしまっていたことによる孤独感、などが考えられよう。この時、既に曇隆は、政権関與の願いを断ちかねて始寧の山中から都に出て行った靈運を見放して旅に出て行方はわからず、謝惠連は仕官のために都に去っていた。

永嘉郡太守であった時期の後半から、始寧の墅における二年餘りの間に詠んだ詩には、靈運が此の時期、求め続けていた「自然の理」体得に関わりのある「賞」「美」「理」などの語が多く見られたが、都から始寧に歸ってから後の詩には全く見られなくなっている。勿論、臨川郡赴任途中の詩にもそれらの語は使われていない。

おそらく此の時期には、その絶望感、孤独感から、山中に入って「自然の理」を求める氣にはなれなかったのであろう。「自然の理」体得の目的は、「自然の理」と一体となって永遠の生命を得ることであったが、もはや此の時期の靈運には俗念を去って「自然の理」を体得することは無理であった。ただ佛の教えは來世の救済を約束するものであり、追い詰められ拠り所を失った靈運には佛教の救いに身を託すほかに頼るべきものは無かったのではなかろうか。

このような状況の中に在って靈運は、事業の拡大に専心して孤独の寂しさを紛らせていたようだ。しかし、やがて始寧を統治する會稽太守孟顗との関係が悪化。孟顗は、かねてから靈運の身勝手な言行をこころよく思っていなかった彭城王劉義康の後盾を得て、問題を朝廷に持ち出した。

慌てた靈運は急遽 都へ直行して文帝に事の次第を弁解、幸いにも文帝は事情を了解して此の件についての咎めはなかったが、もはや始寧に歸ることは認められず、臨川内史として都から直接任地に向かうように命じられた。

都から臨川郡に赴任する途中で詠んだ詩には、「初發石首城」「道路憶山中」「入彭蠡湖口」などがある。その内容から靈運のその時の思いを見てみよう。

・「初發石首城」詩（全24句）は始寧の墅に歸ることを許されず、都の石首城（石頭城）から直接 臨川郡に赴任した時の詩である。

13 故山日已遠　故山は日に已に遠く
14 風波豈還時　風波 豈に還る時あらん
15 茗茗萬里帆　茗茗たり 萬里の帆
16 茫茫終何之　茫茫たり 終に何くにか之く

～

21 欽聖若旦暮　聖を欽ひて 旦暮の若く
22 懐賢亦悽其　賢を懐ひて 亦た悽其む
23 皎皎明發心　皎皎たり 明發の心
24 不為歳寒欺　歳寒の為に欺かれず

「故郷の山は日増しに遠くなってゆく、風波の患いを思えば還れる時は いったい有るのであろうか。はるばると続く萬里の船路、前途は果てしもなく 終には何処へ行き着くことやら。～聖人（舜帝）を慕っては すぐにも會いたくなり、賢者（屈原）を懐えば 亦た悽ましくてならない。聖賢を慕う私の心は清く明るく、讒人のために欺かれたりはしない。」

・「道路憶山中」詩（全22句）は、道中、始寧の山居での伸びやかな暮らしを思い起こしながら今の悲しみに沈ん

でいる。

17 懐故叵新歓　故きを懐ひて　新たなる歓びは叵く
18 含悲忘春暖　悲しみを含みて　春の暖かさを忘る
19 悽悽名月吹　悽悽たり　名月の吹
20 惻惻廣陵散　惻惻たり　廣陵の散
21 慇懃訴危柱　慇懃に　危き柱に訴へ
22 慷慨命促管　慷慨して　促き管に命ず

「昔のことばかり懐っているので、新しい歓びは得られず、悲しみを抱いているので春の暖かさも忘れている。名月の曲は悽ましく響き、廣陵の曲は惻惻と胸を打つ。ねんごろに高い琴の音に思いを託し、速い調べ の笛の音に思いを込める。」

・「入彭蠡湖口」詩(全20句)は、船旅を続けて彭蠡湖(鄱陽湖。その南が臨川郡)に至った時の作。

1 客遊倦水宿　客遊して水宿に倦み
2 風潮難具論　風潮は具さには論じ難し
3 洲島驟迴合　洲島は驟ば迴り合はさり
4 圻岸屢崩奔　圻岸は屢ば崩れ奔る
5 乗月聴哀狖　月に乗じて哀しき狖のこえを聴き
6 浥露馥芳蓀　露に浥ひて芳蓀は馥し
7 春晩緑野秀　春晩れて緑の野は秀り
8 巖高白雲屯　巖高くして白雲は屯まる
9 千念集日夜　千念日に夜に集まり
10 萬感盈朝昏　萬感朝に昏に盈つ

「船旅を重ねて水辺の宿にも飽きた、風や潮のことなど細かくは話せそうにもない。中洲や島はしばしば曲がったり合わさったり、突出した岸はしばしば川の中に崩れ込んでいる。月に乗じて哀しげな猿の鳴き声に耳を傾け、朝露に濡れて芳草は香わしい。春も暮れ緑の野には草が生い茂り、巖は高く白雲がその上に屯まっている。千もの念いは日に夜に集まり、萬もの憂いは朝に暮に盈ちている。」

いずれの詩にも嘗て永嘉郡で、また始寧の墅（前期）での山水遊行の詩に見られたような氣持ちの張りも明るさも無く、ただ深く沈み込んでおり、遠く故郷を離れる悲しみと、これから先どのようなことになるのかという前途の不安に思いは乱れている。

孟顗に「異志有り」と訴えられてから廣州棄市に至る二年餘りは、特に孤独感と絶望感に陥ることが多かったようだ。このような状況に在って靈運が佛教に救いを求めたとしても不自然ではなかろう。

永嘉郡から始寧に歸った時期に熱心であった、山水遊行による「自然の道理」追求も、氣持ちに余裕のあった時のこと。今となっては、頼るところは來世の救済を説く「佛の教え」だけであったようだ。

沈約が「臨死詩」に手を加えて佛教色を消してしまったのは、彼が靈運を、どこまでも「君子の志」を遂げんとして突き進む「褊激の性」の人と見ていたことによるのであろう。その靈運がたとえ初志が遂げられなくなっ

たとしても、佛の教えに逃避するようなことは有り得ないと考えてのことと思われる。沈約のそのような霊運観を確かめるために、その「靈運傳」撰述の姿勢を次に見てみる。

三　沈約「謝霊運傳」撰述の意図

沈約は謝靈運をどのような人物としてとらえ、どのように其の傳をまとめようとしていたのか。また沈約は、靈運と関わりの深い顔延之を同じく「褊激の性」の人と評して、靈運、延之の生涯を対比的に扱っているようであるが、沈約の意図はどこに在ったのか。沈約の「謝霊運傳」と「顔延之傳」によって、その霊運観を見ていく。

1『宋書』謝靈運傳の構成

ここでは靈運傳の構成に見られる沈約の意図を探る。沈約は靈運傳の構成として、次の二つのことを柱としているようだ。

（1）「褊激の性」による靈運の言行を年を追って挙げ、その結果を記す。

（2）本人の作品のうち、その時々の靈運の思い、行動を示しているものを収録する。

それぞれについて少し詳しく見ていくことにする。

（1）「褊激の性」による言行を列挙

沈約は靈運の「褊激」の性による言行を、次のように年をおって挙げ、その言行の結果を記している

1　殺人により免官

仍除宋國黄門侍郎、遷相國従事中郎、世子左衛率。坐輒殺門生、免官。

仍て宋國の黄門侍郎に除せられ、相國の従事中郎、世子の左衛率に遷る。門生を輒ち殺すに坐して、官を免ぜらる。（『宋書』本傳）

靈運の門生が愛妾と姦通。靈運は怒りにまかせて門生を殺してしまった。そのことを尚書僕射の王弘に弾劾され、免官となる。

2　廬陵王（劉裕の第二子）に接近して、徐羨之、傅亮ら権臣の政治を批判

自謂才能宜參權要、既不見知、常懷憤憤。廬陵王義眞少好文籍、與靈運情款異常。少帝即位、權在大臣。靈運構扇異同、非毀執政、司徒徐羨之等患之、出為永嘉太守。

自ら謂へらく 才能は宜しく權要に參はるべしと。既に知られざれば、常に憤憤を懷く。廬陵王義眞は少くして文籍を好み、靈運と情款 常に異なり。少帝の位に即くや、權は大臣に在り。靈運は異同を構扇し、執政を非毀すれば、司徒徐羨之らは之を患ひ、出だして永嘉太守と為す。（『宋書』本傳）

靈運の行為を危険視した司徒徐羨之らによって、永嘉太守に左遷された。

3　一族の者たちの反対に耳を貸さず、永嘉太守を一年で

止めて始寧の墅に歸った。

出守既不得志、遂肆意遊。徧・諸縣、動踰旬朔、民間聽訟、不復關懷。～在郡一周、稱疾去職。従弟晦、曜、弘微等、並與書止之、不從。～與隠士王弘之、孔淳之等、縱放為娯、有終焉之志。

出だされて守となり既に志を得ざれば、遂に意を肆まままにして遊ぶ。諸縣を徧・し、動もすれば旬朔を踰え、民間の聽訟は、復た懷ひに關けず。～郡に在ること一周、疾と稱して職を去る。従弟の晦、曜、弘微ら、並びに書を與へて之を止むるも、從はず。～隠士の王弘之、孔淳之らと、縱放して娯しみを為し、終焉の志有り。(『宋書』本傳)

任期のある太守の任を勝手に一年で止めて郷里に歸るということは、政府の命令を無視する行為であり、その反抗的な態度は多くの政府関係者の顰蹙を買ったことであろう。

4　都における秘書監、侍中としての二年間、政權の中樞に加えらえず、憤懣遣る方なく靈運は、規則を無視して勝手な行動を続ける。

太祖登祚、徵為秘書監。尋遷侍中。既自以名輩、才能應參時政。初被召、便以此自許、既至、文帝唯以文義見接、每侍上宴、談笑而已。王曇首、王華、殷景仁等、名位素不踰之、並見任遇、靈運意不平、多稱疾、不朝直。～上不欲傷大臣、諷旨令自解。

太祖の登祚するや、徵して秘書監と為す。尋で侍中に遷る。既に自ら以へらく「名輩にして、才能は應に時政に參ずべしと。初め召さるるや、便ち此を以て自ら許すも、既に至るや、文帝は唯だ文義を以て見接し、上宴に侍する毎に、談笑するのみ。王曇首、王華、殷景仁らは、名位は素より之に踰えざるに、並びに任遇さるれば、靈運は意 平らかならず、疾と稱し、朝直せざること多し。～上は大臣を傷つくることを欲せず、旨を諷して自ら解かしむ。

(『宋書』本傳)

始寧の墅に歸って二年餘、佛道修行に精進していた靈運は、文帝の徵召に應じて、今度こそはと期待して朝廷に入ったが、文帝は靈運を文事の相手として扱い、政權の中樞に任用するつもりはなかった。靈運はその待遇を不満として、病氣と偽り規則を無視して遊放を続けたために、病氣療養という名目で始寧の墅に歸らされている。

5　始寧（後期）における行動

・遊娯宴集、以夜続晝―免官

靈運、以疾東歸、而遊娯宴集、以夜續晝。復為御史中丞傅隆所奏、坐以免官。是歳、元嘉五年。

靈運は、疾を以て東歸するも、而も遊娯 宴集し、夜を以て晝に続く。復た御史中丞傅隆の奏する所と為り、坐して以て官を免ぜらる。是の歳、元嘉五年なり。

二年間の不本意な都暮らしの憂さ晴らしに、靈運は「夜を晝に續け」て「遊娯宴集」に耽ったため、御使中丞の傅隆によって上奏され免官となる。

・山を鑿ち湖を浚い、功役 已むこと無し。

靈運因父祖之資、生業甚厚。奴僮既衆、義故門生数百、鑿山浚湖、功役無已。

靈運は父祖の資に因りて、生業は甚だ厚し。奴僮既に衆く、義故の門生は数百、山を鑿ち湖を浚ひ、功役已むこと無し。

自分の土地に手を加えるのであるから、政府や會稽郡からの咎めは無かったであろうが、要注意人物による要注意事業として目を付けられたことであろう。

・山賊と疑われる行動

嘗自始寧南山、伐木開逕、直至臨海。従者数百人。臨海太守王琇驚駭、謂為山賊。徐知是靈運、乃安。～在會稽、亦多徒衆、驚動縣邑。

嘗て始寧の南山より、木を伐りて逕を開き、直に臨海に至る。従者は数百人。臨海の太守王琇は驚駭し、謂ひて山賊と為す。徐て是れ靈運なるを知りて、乃ち安んず。～會稽に在りても、亦た徒衆を多くして、縣邑を驚動す。

（『宋書』本傳）

これも違法ではないようなので処罰は受けなかったが、「數百人」による大移動であるから「縣邑を驚動」させる事件ではあった。

・大規模な農地開発事業。會稽太守孟顗との争い

會稽東郭有回踵湖。靈運求決以爲田。顗堅執不與。靈運既不得回踵、又求始寧岯崲湖爲田。顗又固執。靈運謂顗非存利民。正慮決湖多害生命。言論毀傷之、與顗遂構讐隙。

會稽の東郭に回踵湖有り。靈運は決して以て田と爲さんことを求む。顗は堅く執りて與へず。靈運は既に回踵を得ざれば、又た始寧の岯崲湖を求めて田と爲さんとす。顗は又た固く執る。靈運謂へらく顗は存して民を利せんとするに非ず。正に湖を決して多く生命を害するを慮るなりと。言論もて之を毀傷し、顗と遂に讐隙を構ふ。（『宋書』本傳）

靈運の勝手な言行に腹を立てた孟顗は「靈運に異志有り」として「兵を發して自ら防ぎ、露板もて上言」したので、事は大きくなった。靈運は弁解のために上京。文帝は一應は理解を示したが、靈運は始寧に歸ることを許されず、そのまま臨川内史に遷された。

・臨川太守在任中の反逆事件

在郡遊放、不異永嘉、為有司所糾。司徒遣使収靈運、靈運興兵叛逸、遂有逆志。為詩曰、韓亡子房奮、秦帝魯連恥。本自江海人、忠義感君子。追討禽之、送廷尉治罪、徙付廣州。

郡に在りて遊放すること、永嘉に異ならず、有司の糾す所と為る。司徒は使を遣して靈運を収めんとするも、靈運は兵を興して叛逸し、遂に逆志有り。詩を為りて曰く、

「韓亡びて子房は奮ひ、秦帝たらんとして魯連は恥づ。
本自り江海の人なるに、忠義は君子を感ぜしむ。
追討して之を禽へ、廷尉に送りて罪を治め、廣州に徙付す。（『宋書』本傳）

郡守としての仕事をせずに「遊放」して「有司に糾され」、靈運収監のために來た官兵に抵抗して、遂に「逆志」を表してしまった。

以上のように靈運の、始寧に歸ってからの「褊激」の言行は次第に激しさを増して、成り行き上のこととはいえ、宋朝への「叛逆」行為に走るまでになってしまう。

靈運の場合、「褊激」なる言行の原因は、多くは政権の樞要な地位に就かんとする願望が叶えられなかったことにあり、霊運を政治に関わらせようとしない権力者側への反撥であったが、後には反撥の対象が広がって「褊激」なる言行が次第に激しくなっていき、そのまま極限にまで至ったことを沈約は表現せんとしたのであろう。

(2) 靈運の詩文の本傳収録について

沈約は「謝靈運傳」に、その「撰征賦」「山居賦」「勧伐河北表」「還旧園作」「詣闕上表」「臨川詩」「臨死詩」などを引用している。沈約がそれぞれの作品を引用した意図を推測してみるに、次のようなことが考えられる。

「撰征賦」――晉末、劉裕の北伐の功を記しながら、それと対比させつつ謝玄、謝安の晉朝に盡した功績を讃えている。晉末の作で、晉朝の後を狙う劉裕の動きを意識しながら、嘗て晉朝に盡した謝玄、謝安の生き方こそ「君子の志」の発露であると考えていた。やがて宋朝になって靈運は心は晉にありながら身体は宋の臣という捻れた状態に置かれ、何如に生きて行くべきか悩みは深かった。

「山居賦」――この時期、「臨死詩」に詠うように「君子の志」もて「巖上に泯」てることを考えていたと、沈約は考えたのではなかろうか。或いは「君子の志」が遂げられそうにない悩みと歎きを佛の悟りによって超越せんとして、曇隆らと修行に精進したと考えたか。

「勧伐河北表」――「君子の志」の具体策の一つとして「北伐救国策」を提示。採用される可能性を期待しながらの上表であったろう。

「還舊園作」――顔延之と范泰への詩。始寧の墅に歸ってからの生活の様子を記し、帰郷の理由は「わが身を守るため」すなわち政界からの霊運抹殺を折りあらばと狙っている者たちの企みを避けるためであったとする。

「詣闕上表」――宋朝への恭順の意を表明。権力者側の霊運抹殺の企みから逃れるために、必死の弁解を展開。

「臨川詩」――靈運の「君子の志」への思い。臨川郡遷徙のあと、それまで我慢を重ねて抑えてきた「君子の志」が、自分を取り巻く環境の急変によって表面に突出したものであろう。

「臨死詩」――生涯の願いであった「君子の志」が遂げられなかった歎き。

靈運は生涯に亘って「君子の志」を遂げることを目的としていたようであるが、それは具体的には祖父謝玄が大挙南下してきた前秦苻堅の大軍を撃破して晉朝を救ったような救国の功績を挙げることであった。しかし世は宋朝となり「君子の志」を遂げることは極めて難しくなり、

その前提条件である政権枢要の地位に加わろうとしても、文帝をはじめ重臣たちの承認を得ることは極めて難しい状態にあった。

沈約の「謝靈運傳」撰述にあたっての意図は、次のようにまとめることができよう。

沈約は自分の謝靈運像に基づいて傳の構成を考え、

①靈運の「褊激の性」を強調するために、「褊激の性」による言行を列挙して、「褊激」の程度が次第に激しくなり、結局それが命取りになったことを述べる。（顔延之のように、自分の「褊激の性」を緩和して致命傷となるのを避けるなどの対応を靈運は全く考えていなかった。）

②本人の作品のうちから生涯の節目となるものを選んで収め、それを通して其の時々の靈運の思いを表現する。

という二つのことを柱とし、その目的にそって集めた資料を組み合わせて、「君子の志」を遂げんとした靈運の生涯を描いているようだ。

沈約は靈運という人物について、どのように考えていたのであろうか。「靈運傳」を踏まえて推測するに以下のようになろう。すなわち、靈運は前代以來の大貴族の家柄で、詩文、学問に優れ、取り分け政治面での十分な能力があると自負しており、その能力を存分に發揮し、祖父の謝玄のように晉朝の危機を救うような働きをしたいと願っていた。靈運にとってはそれが「君子の志」を遂げることであったが、しかし王朝の交代によって其の志を叶えることは難しくなった。それではどうするか。宋朝に仕えて政権の中枢に加わり、勢力を蓄えて時機を待つということしかなかった。しかしそのための靈運の試みは全てうまく運ばなかった。彼は「褊激の性」の人であり、我慢することが苦手であった。結局「褊激の性」のままに行動して「君子の志」を遂げることはできず、「褊激の性」の激発によって身を滅ぼしてしまった、と。従ってその生涯は悲劇に終わらざるを得なかった。

その生涯を纏めてみると、靈運は「君子の志」を遂げるために、先ず政権に参與する必要があったが、時の権力者たちは、靈運が前朝晉の名家の出であり、「褊激の性」の持ち主で協調性も無かったので、政治面での枢要な地位に就けようとはしなかった。そのため靈運は始寧の墅での隠棲を試みたが、二年後に文帝に召し出された。初めは出仕を渋っていた靈運も政権參與の願望を断ち難く、今度こそはと期待して出て行ったが、文帝は彼の詩文の才だけを評価していた。或いは不平分子である靈運を、監視を兼ねて近くに置いておこうという考えがあったのかもしれない。かくて靈運の「褊激」の性が、またもや頭を擡げてくる。

初めは、時の政治批判。職務の怠慢、規則を守らない。などの反撥であったが、始寧に歸されて後、放逸なる遊びの故に免官となってからは、始寧の墅を足場に大規模な農地の造成工事、臨海郡まで数百人の従者をつれての山中跋渉。その間、會稽太守孟顗との争いの結果、不穏

の動き有りと朝廷に訴えられて、臨川内史に遷され「反逆罪」を犯してしまう。それらは「褊激」の度合いが次第に激しくなっていった結果であった。

このように見てくると沈約は、「君子の志」を遂げんとするもかなわず、自分の前に次々と現れる障害に対して「褊激」なる言動を繰り返し、その程度が激しくなるにつれて次第に身動きがとれなくなっていき、その流れのままに廣州棄市にまで至ってしまったものと靈運の生涯をとらえ、その考えに基づいて靈運傳を構成しているようだ。

2「顔延之傳」との関わり

沈約は「謝霊運傳」を「顔延之傳」と対比的に扱って、二人の人物像を際だたせようとしているようだ。[2] ともに「褊激の性」の持ち主でありながら、霊運は四十九歳で棄市の刑に處せられ、一方、延之は七十三歳の生涯を全うした。それは何故なのか、そのわけを探ることによって両者の人間としての違いが見えてくる。沈約の狙いはそのあたりに在ったのであろう。

その為に「延之傳」においても霊運傳の場合と同じように、「褊激の性」による言行の内容とその結果を列挙し、また本人の作品を挙げて生涯の流れを記して対比させている。

「褊激の性」による言行の内容とその結果については、靈運が其の「褊激」なる性格のまま眞直に突き進むのに對して、延之の場合は同じく「褊激」なる性格ではあったが、併せて人の心の裏を読む慎重さを備えていた。沈約はこのような二人を比較對應させることによって、それぞれの言行の内容と其の結果を際だたせようとしたのであろう。

本人の作品を挙げて生涯の流れを記すことについても「靈運傳」の場合と同様に、その時々の本人の思い、考えが、よく表されているものを選んでいる。それを繋ぎ合わせることによって延之の生涯が読みとれるようになっている。

靈運の場合、「撰征賦」「山居賦」「勧北伐表」「還旧園作」「詣闕上表」「臨川詩」「臨死詩」によって、「君子の志」を遂げることに関する霊運の思いと行動がそれぞれの方向から語られている。一方、「延之傳」には、左遷に対する激しい恨みを相手の反撥を考えずに述べた「祭屈原文」「五君詠」と、それとは逆に子弟に慎重な世渡りを説く「庭誥」が傳の三分の二を費やして引かれており、その矛盾する言行についての理由の推測を読者に委ねようとしている。

このような対比によって、同じく「褊激の性」の持ち主でありながら、一方は廣州棄市、一方は天寿を全うするという、明暗を異にするに至った二人の「生き方」の違いが明らかにされる。沈約が靈運傳と延之傳を対比的にまとめた狙いは、このあたりにあったのであろう。

僅か謝霊運傳、顔延之傳の二傳についてであるが、沈約の史傳撰述の態度をみるに、それぞれ自分が抱いている人物像に基づいて其の傳を撰述しているようだ。史傳というものは歴史上の人物の生涯の記録ではなく、後の人が記録に基づいて纏めたものであり筆者の考えを通しての傳記であるから、筆者の其の人物についての見方も當然そこに入ってくるし、資料の取捨選択も筆者の判断による。従ってそこに現れるのは沈約の「謝霊運傳」であり「顔延之傳」であった。

「謝霊運傳」についていえば、結びに置かれた「臨死詩」が『宋書』引（全12句）と『廣弘明集』（全14句）とでは結末部分に大きな異同があり、どちらに拠るかによって霊運の最期の思い、更にはその人物についての解釈が大きく異なってくる。沈約が「臨死詩」に手を加えたのは、彼の霊運観にしたがったものであろう。[3] また顔延之傳については、「庭誥」が傳全体の三分の二を費やして長々と引かれているのは、これも延之が「褊激の性」だけの単純な人物ではなかったことを証明せんとしてのことであった。

『宋書』一百巻を僅か兩巻によって判断することはできないが、『史記』が単なる記録ではなく、司馬遷という人の書いた歴史であるのと同様に、『宋書』も沈約の書いた宋の歴史であったと言えよう。

注

（1）或いは「臨死詩」には二種類のものが傳えられていて、沈約は『宋書』に引かれているようなものを採用したのかもしれない、ということも考えられる。もしそうであれば、沈約は何故そちらを採用したのか、論はその方向に進んでいくことになるが、しかし當時二種類の「臨死詩」が存在したことを証明することは難しい。

（2）「『宋書』顔延之傳について」は『中国中世文学研究』54に發表した。

（3）稀代麻也子「『宋書』のなかの沈約」に次のようにある。

「『宋書』における『恨我君子志、不獲巖上泯』という結びは、決して自分の今までの生き方を後悔するものではない。『宋書』の臨終詩は自分の生を力強く肯定するものであって、來世を夢見て人生を精算し切り捨てようとするものではないのである。この詩を、沈約が理解し、その理解に従って列傳中に位置づけたように読めば、あくまでも自分の志を貫いた褊激の表現者が、苦しみまで含めて丸ごと自分の一生を受け容れていたことを示す作品として、解釈の可能性を広げるのである。」